

21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」

—中高一貫の新しい社会科・地歴公民科教育を創造する中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

小澤富士男・大野 新・小林 汎
篠塚 明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田 俊弘

21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」

—中高一貫の新しい社会科・地歴公民科教育を創造する中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

小澤富士男・大野 新・小林 汎
篠塚 明彦・丸浜 昭・宮崎 章
吉田 俊弘

本年度は、本テーマ、すなわち『21世紀に生きる子どもたちと学ぶ「アジアの中の日本」』による研究プロジェクトへの取り組みの2年目にあたる。

日本は、紛れもなくアジアの一員である。しかし、そのことがどれだけ生徒のなかに、また我々自身のなかに意識されているだろうか。まもなく迎える21世紀に、日本とアジアとのあるべき関係とはどのようなものなのか。生徒とともに考えていく必要があるだろう。

昨年度は、地理分野・歴史分野・公民分野それぞれにおいて、「アジアの中の日本」を教材化し、教室現場で生徒にどのように教えていけばよいのか、そのための基礎的研究が行われた。この基礎的研究を通して、それぞれの分野における教材化への方向性が固まったと言える。

まず、地理分野にあっては、地域や文化としてのアジアとは何か、またアジアにおける環境問題と日本の関係がテーマとして浮かび上がってきた。また、歴史分野においては、歴史としてのアジアの概念、海洋を結ぶアジアネットワークとしてのアジアのとらえ方、戦後問題をめぐる日本の位置などが大きな課題として浮かび上がってきた。さらに、公民分野では奇跡の成長を遂げたアジア経済が、なぜバブルと短期資本の移動に翻弄されていったのか、またアジア経済の構造的な問題はどこにあるのかなどが問題点として浮上した。

5カ年計画の2年目となる本年度は、上記のような昨年度の研究を踏まえたうえで、「アジアの中の日本」を教育の場で具体化していく年として位置づけられる。各分野においては、それぞれの視点から「アジアの中の日本」をめぐる実践が試みられる。過去に行われてきた同種の研究業績の評価や現に行われている教材研究を通して、今求められる「アジアの中の日本」の教育の現実化・実践化が、本年度の主たるテーマとなっている。

アジアのなかの日本

—世界史学習の視点から—

筑波大学附属駒場中・高等学校社会科学

篠塚 明彦

1. はじめに

私は、現在筑波大学附属駒場高校で世界史を担当して3年目を迎えている。本校のカリキュラムでは、2年生に「世界史B」が3単位置かれており、もちろん全員必修となっている。その他に、3年生に選択科目として「世界史B」が2単位で置かれている。一昨年（1997年）、すなわち着任一年目には、一年目ということもあり、2年生に配当されている必修の「世界史B」では、教科書の記述に従って、古代から通史的に、そして網羅的（アフリカや太平洋世界も含め全ての地域を取り上げる）に授業を行ってみた。しかし、この授業の進め方は大きな問題を残す結果となってしまった。3単位の授業では、一年間を通じて確保できた時間数は、結果的に80時間にも達しなかった。年度当初の第一時間目のオリエンテーションや身体計測などの理由によって授業時間の大半がつぶれてしまった時間などを考慮すると、実質的に一年間で確保することのできた授業時数は75時間程度となってしまったのである。当然のことではあるが、授業では現代史まで取り上げることなどは到底できず、授業で扱うことができたのはようやく19世紀初めの時代までであった。3年生になると選択科目として世界史を選ぶこともできるので、世界史を選択した生徒たちは引き続き19世紀以降の世界を学ぶことになった。98年度年度の場合には、引き続いて世界史を学んだ生徒は全体の4割余りで、彼らは授業のなかで現代史まで学ぶことができた。しかし、問題は世界史を選択していない生徒が6割近くも存在しているということである。すなわち、半数以上の生徒たちは現代史を学ぶことなく高校での世界史の学習を終えてしまったということなのである。

数年前から、いわゆる「自由主義史観」なるものが登場してきているが、こうしたものが一定程度の勢力をもち、まかり通るような土壌を作りあげている要因の一つには、現代史学習の不十分さというようなこともあげられよう。そうであるとするならば、半数以上の生徒が現代史を学習せずに授業を終えるような世界史の授業構成は大いに問題が残るものといわざるを得ない。そもそも世界史を学ぶことの意義の一つには、現代世界の諸課題がどのように生じてきたのかを考えるということが挙げられよう。こうしたことを踏まえると、年間75時間程度の授業時数でも、全ての生徒が現代史を学習することのできるような世界史の授業構成というものが自ずと必要となってくる。

ところで、現在すすめられている「教育改革」においては、「環境」・「福祉」・「情報」と並んで「国際化」ということがキーワードとなっている。ところが、国際化といわれるとすぐに小学校での英語教育の導入が論議されるなど、相変わらず欧米に目を向けた国際化となってしまう傾向があるように思える。ここには明治以来の脱亜入欧、「欧米に追いつき追い越せ」という意識からいまだに抜け切れていないことがあらわれているのではないだろうか。これからの世界を生きていく日本の高校生にとって必要な国際化とはどのようなものであるべきなのか、このことも世界史の授業構成を考えていくうえでは必要な視点であると考えます。

2. 「世界史B」の内容の精選

1) 近代から始める世界史

「世界史A」ではもちろんのこと、「世界史B」においても近現代史が重要視されなければいけないことは今や一般的となってきている。近年の各大学における世界史の入試問題の出題傾向を見てみると、国公立、私立を問わず、全体として近現代史の分野からの出題が圧倒的に多くなってきていることがわかる。このことは、大学入試の問題でさえも近現代史の重要性を意識せざるを得ないということのあらわれに他ならず、現代の世界を理解する必要性が高まっていることを示しているよう。

それでは実際に「世界史B」を学習するうえで、全体の構成をどのようにすればよいのだろうか。先程述べたように、「世界史B」を3単位でおこなうとすると年間で75時間程度、標準単位通りに4単位で扱ったとしても年間で100時間にも満たない程度の授業時数しか確保することはできない。このような状況のもとにあつて、古代から現代まで全ての時代を取り上げて授業を行おうとすれば、仮に可能であったとしてもその内容は極めて浅薄なものとなることが十分に予測される。限られた時間数のなかで現代史を十分に上げるとすれば、当然ながら大幅な内容の精選を迫られることとなる。そこでまず考えられることが、近代から世界史の授業を始めるということであろう。実際に、カリキュラムのなかで「世界史B」が必修として置かれている学校においても、近現代史を重視し、16世紀ころから世界史の授業を始めるというところが増えてきているようである。

15世紀の終わり頃になるといわゆる「大航海時代」がはじまり、ヨーロッパ主導のもとに世界が一体化の方向へと少しずつ動き始める。古代以来、諸地域世界間の交流は見られたが、16世紀以降の世界の結びつきはそうした単なる諸地域世界間の交流とは異なっていた。16世紀以降、ヨーロッパによって結びつけられていった諸地域世界では、それまでの社会構造までも根本からの変革を迫られることとなり、世界全体が大きく変化をし始める。そのために、この時代をもって本当の意味での「世界史」の始まりと捉えるような考え方も広く受け入れられつつあり、その意味では16世紀から世界史の授業を始めるということには一定の妥当性があるといえよう。

近代から始める世界史に授業というのは、限られた授業時数の中で現代史を十分に上げる

世界史の授業構成としては確かに有効な方法であることは疑いない。しかしながら、ここでいささかの疑問が生じてくる。16世紀以降の時代のみを取り上げるとなると、それはヨーロッパ世界が成長し、世界を支配していく過程の世界史となり、アジアをはじめとして、アフリカやラテンアメリカがヨーロッパ世界に従属させられていく過程を描く世界史ともなりかねないのではないだろうか。東アジアにおいては、16世紀以降の時代は、明・清といった中華帝国が繁栄をする一方で、すでにヨーロッパ諸国の進出が本格化していく時代でもある。南からはスペイン・ポルトガルをはじめとする西ヨーロッパ諸国が、また北からはロシアが影響を及ぼしはじめ、やがて18世紀・19世紀と進むに従って東アジアの社会は大きく変化し、ついにはヨーロッパ諸国の従属下に置かれるようになっていく。16世紀以降の時代のみを取り上げると、東アジアでは明・清という中華帝国の繁栄を最後として、以後ヨーロッパに従属させられていく歴史を描くことにもなりかねないのである。I・ウォーラステインは「世界システム論」を提示して新しい世界史の見方を提示してきた¹⁾。しかし、この世界システム論も近代以降いかにしてヨーロッパのシステムが地球規模で広がっていったということを描いたものに他ならず、そこからはアジアなどシステムに組み込まれていった諸地域の主体性を読みとることは難しい。

近現代史を重視した構成というものにはいささかも疑問を挟む余地はないのであるが、近代以前における諸地域世界の主体性というものが見えないような世界史というのはどのようなものであろうか。日本の高校生が学ぶ世界史としては、ヨーロッパの発展や主体性ばかりが目につき、日本を含めたアジア世界の主体性が見えなくなってしまうような世界史であっては、大いに疑問に感じるところである。

2) 東アジア世界の重視

上野輝将氏は世論調査の結果などをもとにして、日本の若い世代の一部の間には対外的優越感や大国意識が存在する一方でアジアに親しみを覚え、知識も乏しく軽視しがちな傾向のあることを指摘している²⁾。

近年、ワールドカップサッカーをはじめとする様々な国際的スポーツイベントが盛り上がりを見せているが、そのなかにあつて生徒たちの応援の様子などを見ていると上野氏が指摘しているような大国意識やアジア諸国に対する優越感に通じるようなものを端々に感じとることができる。日本のチームや選手たちが欧米のチームや選手たちに対して勝ってほしいと願うが、何としてもアジアのチームや選手たちだけでは負けてほしくないというような意識が感じられたのである。

先頃、生徒たちに対してアジア認識に関わる簡単なアンケートを実施してみた。その結果、興味深いことがわかってきた。生徒たちに「アジアの国といわれて思い浮かぶ国を5カ国あげなさい」と尋ねたところ、3割以上の生徒が5カ国の中に「日本」をあげていた。しかし、こうした生徒たちに「アジアのイメージ」を尋ねると、少なからぬ生徒が、「熱い」「人口密集」「開発途上」など東南アジアや南アジアのイメージと思われるような応えをしていた。つまり、彼らのな

かでは、空間的には日本をアジアと認識してはいるものの、内実としては日本とアジア諸国を切り離して認識しており、日本をアジアの一員とは考えていないのである。

先にふれた「自由主義史観」を生む土壌を作り出した要因のなかに、現代史学習の不十分さと並んで、こうした大国意識やアジア軽視の視点というものも考えることができる。すなわち、世界史教育の視点から見ると、現代史学習・アジア学習の不十分さが「自由主義史観」を成長させる土壌をつくってきってしまったとも言えよう。

近代以降のヨーロッパ世界の成長を学び、そこに追いついていった日本というような形で歴史を学んでしまえば、当然のこととして生徒たちの「日本＝大国」という意識やアジア軽視の見方を助長していってしまうことが予想される。近代からはじめる世界史は、現代史を深く学ぶ上では有効であるが、日本を含めたアジア世界の主体的な歴史を学ぶという点からは不十分さを持っていることは否めないと思う。

日本は古くから中国をはじめとする東アジア諸地域との接触と交流の歴史を持っている。日本は、はじめから「日本」として存在していたわけではなく、東アジア世界の諸地域、さらにはそれをとりまく諸地域世界との接触や交流の中で少しずつ形づくられ、成長してきたのである。このことは生徒たちにしっかりと理解してもらいたいことである。生徒たちには、偏狭な大国主義にとらわれて、アジア諸国を軽視するような見方を身につけてほしくはないのである。そのためには、アジア世界への視点というものを重視しなければならないであろう。

授業時間数は限られているとはいえ、アジアへの視点、とくに東アジアへの視点というものは、是非とも全体の授業構成のなかで大きなウェイトを持たせてに組み込みたいところである。授業時数の制約もあるなかで、近現代史及び東アジアへの視点を重視するとなると前近代史の取り扱いについては大幅な精選が必要となる。そこで、前近代の歴史については、諸地域世界のなかでも直接的に取り上げるのは東アジア世界のみとしてはどうだろうか。そして、東アジア世界の歴史を中心に置きながら、他の地域世界については東アジア世界との関連のなかで捉えていくという全体の構成方法を考えてみたい。

鈴木亮氏は、世界の捉え方として次のような見方を述べておられる。「地域世界を設定することは、全世界をいくつかの地域世界に分けるというのではなく、それぞれの地域世界がいっしょになって全地球的世界を構成しているとみるのである。それぞれの地域世界は、みずから生き、自立し、歴史・世界史をつくっている主体と認識することであり、全部重要性をもっているものとしてみるということだ。…これらの地域世界は、対等の立場で地球的全世界を構成しているとみる。どの地域世界を欠いても、どの地域世界を抜かしても、全地球的世界は成り立たないとみるのである。いらないところはない。」³⁾ いささか長い引用になってしまったが、鈴木氏のこのような世界の捉え方は大いに参考になり、学ぶべき捉え方であると思う。全ての地域世界の主体性的な動きというものは取り上げられるべきものであろう。しかしながら、実際には、授業時数の制約という問題があるために、直接全ての地域世界を取り上げることは残念ながら不可

能と言わざるを得ない。そこで、近現代認識の欠如、ゆがんだ大国意識に陥りやすい傾向やアジア軽視の姿勢というような現在の日本の高校生の現状を踏まえたうえで、前近代においては東アジア世界を中心に据え、近現代史に重点を置くという世界史の全体構成がより妥当な在り方として考えられる。ただし、東アジア世界の前近代を取り上げるなかで、東アジア世界だけを見るのではなく、他の地域世界を常に意識しながら見ていくことは必要であろう。

3. 東アジア地域世界の取り上げ方

それでは、東アジア世界をどのように取り上げていけば良いであろうか。

1960年に改訂された学習指導要領に示された世界史における文化圏学習という構想はその後も受け継がれてきた。文化圏学習について、現行の学習指導要領には、「世界史B」の目標に次のように述べられている。「現代世界の形成の歴史的過程と世界の歴史における各文化圏の特色について理解させ、文化の多様性・複合性や相互交流を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」¹¹このように引き続き文化圏学習が強調されており、当然のこととして東アジア文化圏という形で東アジア世界も位置づけられている。また、学習指導要領の文化圏学習の構想を受けて現行の「世界史B」の教科書では、どの教科書においてもなんらかの形で「地域世界」が設定されており、そのなかに東アジア世界もしっかりと位置づけられている。現在、本校で使用している教科書（三省堂『詳解世界史B』）の目次から前近代の東アジア世界にかかわる部分の項目を挙げてみると次のようになっている。

第I編 歴史的世界の成立

第2章 東アジア・内陸アジア世界の形成

- 1 黄河文明と古代殷周時代の中国
- 2 中国古代の統一国家の成立
- 3 内陸アジア諸民族の台頭
- 4 中国の分裂と東アジア世界
- 5 隋・唐帝国と東アジア

第II編 諸世界の歴史的展開

第1章 東アジア世界・内陸アジア世界の変動

- 1 古代統一帝国の滅亡と東アジア
- 2 内陸アジア世界の変動とトルコ人社会
- 3 モンゴル帝国と元

さらに、近代については、「アジアの新展開」という章が設けられており、そのなかに「明帝

国と東アジア」,「清帝国と東アジア」,「明・清の社会と文化」,「朝鮮と日本」という項目が設けられている。この教科書は全体の構成を東アジアから書き始めており、他の「世界史B」の教科書と比べても、東アジア世界への視点が重視された教科書であるといえる。

しかし、目次の項目を見てもわかるように、遊牧民の活動も意識されてはいるものの基本的には東アジア世界は中国の各王朝が軸となって展開するような構成となっている。また、実際に本文の記述をみても、東アジア地域全体が幅広く視野におかれてはいるものの、中国周辺の地域が、中国の強い影響を受けながらも、その一方でいかに個別の道を歩み始めていったのかというスタイルの記述となっており、あくまでも中国の王朝を軸として描いているというような従来からの記述スタイルから抜け切れてはいないという感否めない。残念ながらこのようなスタイルの記述では、東アジア世界を大きく取り上げたとしても、そこからは東アジア世界に暮らしてきた諸民族の主体的な動きは充分には見えてこないであろう。また、中国王朝の変遷が軸となるような東アジア世界の取り扱い方では、東アジアの諸地域との接触と交流のなかで日本が形成されてきたのであるということが意識されにくいものになってしまう。これでは限られてた授業時数のなかにわざわざ前近代の東アジア世界を位置づけることの意味は大きく失われてしまうのである。

それでは、中国王朝の変遷を軸としないような、そして周辺地域との接触と交流のなかで日本が形成されてきたことが意識することのできる東アジア世界の取り上げ方にはどのようなものがあるだろうか。そこで考えられるのが、現在の国境線などにとらわれない海域などの地域世界の設定である³⁾。東アジアという地域世界のなかに、さらに海などを媒介として結びつけられてきたいくつかの小さな地域を設定するという方法である。中国は東アジア全体に大きな影響力を持っていたことは疑いもない。しかし、東アジアの諸民族は中国との関係のみにしぼられて生きてきたわけではない。海上のルートや草原のルートを利用して、周辺との密接な交流を持ちながら、それぞれの気候・風土にあわせて独自の文化を形成してきた。地域の交流を重視すれば、北海道や東北北部と東北アジアの交流の様子や、琉球を中心とした東シナ海域の交流の様子なども見えてくる。それにより、日本がはじめから日本として存在していたわけでないことに気づき、日本の存在を相対化することに結びついていく。

さらにもう一つ、東アジア世界のなかに現在の国境を越えた地域世界を設定する効果が考えられる。それは極めて現代的な課題とも大いに結びついている。各国史的な発想を越えるための方法として海域世界というものは提唱されてきているが、日本を取り巻く海の役割が大きく変化しているなかで、これからはこのような海域世界・地域世界の設定というものがますます重要になってこよう。

米ソの対立が激しかった時代には、日本海やオホーツク海など日本周辺の海は緊張と対立の舞台ともなり、そこにはあたかも目に見えない厚い壁が存在しているようであった。確かに、現在でも北方領土の問題や朝鮮半島の情勢、中国と台湾の関係など多くの問題が横たわっている。そ

れでも、1990年代に入ってソ連の崩壊を契機に状況は確実に変化してきている。今やオホーツク海・日本海・東シナ海は「対立の海」から「共存の海」へと変化しつつある。90年代に入ってからロシア極東部の諸都市や中国東北部諸都市さらには北朝鮮のピョンヤンにまで日本海沿岸都市からの視察ラッシュがおこり、新たな経済的協力関係が模索されている。また、環日本海・環オホーツク海などを舞台とした国際的プロジェクトも構想されている⁹⁾。しかし、このような交流は現在になってはじめて行われるようになったものではなく、実際には古くからの交流の歴史が存在していたのである。それが20世紀に入ってから、海を取り巻く諸国家の対立によって交流が閉ざされてしまっていたのである。現在、近代的国民国家のあり方が盛んに問い直されている。また日本においては、地方分権の必要性も言われるようになってきている。このような時代であるからこそ、現在のような国境が存在しなかった時代の地域交流のあり方を学ぶ意義は大きいといえよう。

それでは具体的に想定される地域世界としてはどのようなものが考えられるであろうか。まず、海を中心とした環オホーツク海地域・環日本海地域・環シナ海地域が考えられる。そして、陸上では、北アジア草原地域・中国農耕地帯などが考えられるのではないだろうか。この中で、環オホーツク海地域には、大陸のアムール川流域からサハリン・北海道・千島列島などが含まれ、環日本海地域には朝鮮半島・沿海州から日本列島中部などが含まれる。そして、環シナ海地域には朝鮮半島・長江下流域・琉球・九州などが含まれよう。また、北アジア草原地域はモンゴル高原東部を中心とした地域であり、中国農耕地帯は黄土高原が中心に考えられよう。これらの地域を設定し、そのなかに日本列島も位置づけることで中国王朝の変遷中心ではなく、また日本をも組み込んだ東アジア地域世界の歴史が描けるのではないかと考えている。

4. 前近代アジアの授業

1) 10時間のアジア前近代史学習

こうした構想に基づいて、昨年度（98年度）の高校2年生必修「世界史B」では、前近代の部分については10時間ほどの授業時間を費やし、次に示すような項目をたてて、授業を進めた。

- ①小麦と稲作（1時間）
- ②儒教と道教（1時間）
- ③草原の人々（2時間）
- ④北の世界の文化（1時間）
- ⑤南の海の世界（1時間）
- ⑥ダウ・カルチャーの世界（2時間）
- ⑦イスラームの世界（2時間）

以上が各項目のテーマである。なお、カッコ内の時間はそれぞれの配当時間である。ここで想定している地域としては、①と②は中国農耕地域、③は北アジア草原地域、④は環オホーツク海地域、⑤は環シナ海地域となる。ここまでが東アジア世界であり、こうした東アジア世界と繋がる地域として、⑥でインド洋世界を扱い、⑦でイスラーム世界を扱った。

実際の授業では、これらの項目を学習したのちに、ヨーロッパの「大航海時代」へと移っていった。

2) 環オホーツク海交流の歴史

それでは次に、前近代の東アジアの学習項目のなかから一つの授業内容について具体的な例を示してみたい。

私は、本校に着任する以前から、世界史の授業のなかで、日本の北方の海を取り巻く地域の交流と接触を取り上げることにしている。この地域の交流と接触を取り上げるねらいとしては次の二つがある。一つには、中国の影響を強く受けやすい東北アジアの人々が中国の影響を受けながらも、必ずしも中国にばかり目が向いていたわけではなく、北海道などとの交流も背景にしながら独自の文化を生み出してきたことを生徒に理解してもらいたいということがある。二つめには、はじめから畿内を中心とした「日本」というものが存在していたわけでないということを理解してもらいたいということがある。日本列島の北方に生きてきた人々は、独自の形で大陸と交流し独自の文化を作り上げてきていたということに気づいてもらいたいのである。授業では以下に示すような内容を扱っている。

①オホーツク文化の形成

4世紀から13世紀頃にかけて、北海道のオホーツク海沿岸からサハリン、千島列島に至る地域にはオホーツク文化と呼ばれる独自の文化が展開されていた。このオホーツク文化は北海道の他の地域に見られる文化とは全く異なる独特のものであった。オホーツク文化の特徴の一つとして、ブタや犬の飼育がおこなわれていたことがその遺跡調査から確認されている。こうしたブタや犬の飼育というものは、同時期の北海道に展開されていた擦文文化には見られないものである。

むしろ、海を渡った大陸のアムール川流域に広がっていた靺鞨文化に認められる特徴である。他にもオホーツク文化の遺跡からの遺物と靺鞨文化の遺跡からの遺物との間には多くの類似点が認められる。このことからオホーツク文化が形成されるにあたっては、陸続きの北海道中部・北部以上に大陸との交流が大きな影響を与えたということを生徒たちには考えてもらいたい。

②元とアイヌの戦い

13世紀、いわゆる元寇と同時期にモンゴル（元）の軍勢は北のほうでも活発な活動を展開していた。元軍はアムール川下流域からサハリンにわたり、そこでアイヌと思われる民族と数回にわ

たって軍事衝突を繰り返している。これは、サハリンやオホーツク海域を生活の舞台としていたギリヤーク人をアイヌの人々が圧迫しはじめたことが発端となっている。アイヌの圧迫にたまりかねたギリヤークが元に支援を求め、元軍が軍事行動をおこしたものである。最終的には、アイヌは元の前に屈して、元との間に朝貢関係を結んでいる。元がギリヤークを支援した背景には、オホーツク海など北の海の世界に広がっていた経済圏を自らの勢力下に安定的に組み込むことをねらいとしていたことなどが考えられる。こうしたことから、13世紀前後にも北方の海を舞台として人々の独自の活動が展開していたことや盛んな接触・交流がおこなわれていたことを確認してもらいたい。

③山丹交易

蝦夷錦と呼ばれる華麗な刺繍の織物がある。この蝦夷錦は日本の江戸時代には松前藩を通して江戸や京などにもたらされている。この蝦夷錦を松前藩は山丹人とよばれる人々との交易によって入手していた。蝦夷錦はそもそも中国で生産されていたものであるが、それを山丹人（アムール川下流域・サハリンに暮らす人々）が交易活動によって北海道にもたらしたのである。江戸時代には、中国・アムール川下流・サハリン・北海道をむすぶ交易ルートが確立されており、このルートによる交易は山丹交易と呼ばれていた。山丹人たちは、中国や日本を相手として絹や毛皮を中心に活発な交易活動をおこなっていた。この時代においても北方には独自の世界が展開し、北の海域を舞台とした交流と接触がおこなわれていた。しかしながら、19世紀以降、こうした交流と接触の道は閉ざされていってしまう。最後に生徒たちには、こうした交流が閉ざされていった背景を考えてもらいたい。

この授業後、生徒とのなかから次のような声が聞かれた。「サハリンなどに昔から人が暮らしていて、そうした人々が現在のロシアや北海道などを自由に往来していたというのは考えてみれば当たり前のことだが、新鮮な気がした。」

このような感想が聞かれたということから、授業のねらいがある程度生徒たちに伝わったのではないかと考えている。

ここでは、一例として北方の海域を舞台とした地域世界の授業を取り上げたが、同様の視点で東アジア地域のなかの小地域世界を授業では取り扱った。このように小地域世界を設定し、そのなかに日本列島も位置づけることにより中国王朝の変遷中心ではなく、また日本をも組み込んだかたちで前近代東アジア地域世界の歴史を描くことができるものと考えている。

このようなかたちでアジア世界の独自性をまず理解し、確認したうえで、ヨーロッパ近代世界の発展について学習していくことによって、アジア世界は独自の活動を展開しており、一方的に

ヨーロッパによって従属させられていくのをの待っていたわけでないということが理解されよう。

なお、現在のところは、授業内容の検討のみで、授業方法についてはまだ十分には検討できていないというのが実情である。こうした授業内容をどのように授業方法の面と結びつけていくのかということは今後の大きな課題の一つである。また、授業内容に関していうならば、アジア世界の「前近代」と「近代」の連続性をどのように考えていくのかという問題も今後検討していかなければならない課題であると思っている。

〔注〕

- 1) I・ウォーラステイン『近代世界システム－農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立－I, II』（岩波書店）1981年
I・ウォーラステイン『近代世界システム, 1600－1750』（名古屋大学出版会）1993年
I・ウォーラステイン『近代世界システム, 1730－1840』（名古屋大学出版会）1997年
- 2) 上野輝将「『従軍慰安婦』論争とナショナリズム」『歴史評論』（576号）1998年4月, pp.21～23
- 3) 鈴木亮「世界史教育とは何をすることか」歴史教育者協議会編『新しい歴史教育1』（大月書店）1993年, pp.22～23
- 4) 1989年版『高等学校学習指導要領』p.23
- 5) アジアにおける海域世界の設定はすでいくつかのモデルが示されている。例えば濱下武志氏によると北からオホーツク海域・日本海域・黄海域・東シナ海域・南シナ海域・インド洋海域などが設定されており、それらの海域世界が連鎖的に結びついていたことが指摘されている。川勝平太編『海から見た歴史』（藤原書店）1996年, pp.162～166
- 6) 大園友和『新・アジアを読む地図』（講談社）1998年, pp.174～177

【参考文献】

上記の文献の他、次のような文献を参考とした。

綿引弘『100時間の世界史授業－資料と扱い方』（地歴社）、1992年

鈴木亮『ちからを伸ばす世界史の授業』（日本書籍）、1987年

歴史教育者協議会編『シリーズ知っておきたい中国I』（青木書店）1996年

菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』（北海道大学図書刊行会）、1995年

大隅和夫・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』（山川出版社）、1997年